

平成 29 年 10 月の解説（府県天気予報）

【10 月の天候状況】

上旬は、北日本では気圧の谷や寒気の影響を受ける日が多く、3～4日は11月並の寒気が流れ込んで標高の高い峠や山間部では雪が降りました。東・西日本では数日の周期で天気が変わり、6～7日は前線を伴った低気圧が通過して、西日本や伊豆諸島で大雨になった所がありました。沖縄・奄美は高気圧に覆われて晴れた日が多く、気温が平年を大幅に上回り、特に7日は那覇で最高気温が33.0に達し、10月として102年ぶりの高温となりました。

中旬は、日本の南に停滞した秋雨前線や湿った空気、寒気の影響で、全国的に曇りや雨の日が多くなりました。特に東日本太平洋側と西日本では、旬間日照時間が平年を大幅に下回りました。寒気の影響を受ける日の多かった北日本では、気温がかなり低くなりました。東日本太平洋側は、旬の後半に北東から冷たく湿った空気が流れ込みやすく、19日は最高気温が12月並の低温となりました。一方、沖縄・奄美は南から暖かい空気が流れ込んだため、気温が平年を大幅に上回りました。

下旬は、北・東・西日本では数日の周期で天気が変わり、沖縄・奄美は湿った空気や台風の影響で曇りや雨の日が多くなりました。台風第21号と秋雨前線の影響で、21～23日は西・東日本を中心に広い範囲で大雨や暴風となり、河川の氾濫や土砂災害などによる人的被害や高潮による被害の発生した所がありました。特に紀伊半島は記録的な大雨となり、22日の日降水量が三重県尾鷲では586.5mm、和歌山県新宮では532.0mmを観測して統計開始（尾鷲は1938年、新宮は1976年）以来10月として最も多くなりました。台風から変わった低気圧に伴って寒気が流れ込んだため、北日本では23～24日に吹雪や大雪となった所があり、23日の日降雪量が北海道の阿寒湖畔で23cm、陸別で14cmを観測し、統計開始（1986年）以来10月としては最も多くなりました。27～29日は台風第22号の影響で、沖縄・奄美～西・東日本の各地で大雨や暴風となりました。特に九州南部は記録的な大雨となり、宮崎県赤江では28日に日降水量391.0mmを観測し、統計開始（2003年）以来最も多くなりました。30日は台風から変わった低気圧が千島近海で更に発達して日本付近は冬型の気圧配置となり、北・東日本では非常に強い風の吹いた所がありました。

月平均気温は、沖縄・奄美でかなり高かった一方、北日本では低く、東・西日本では平年並でした。月降水量は、北日本太平洋側と東・西日本でかなり多く、北日本日本海側と沖縄・奄美で多くなりました。月間日照時間は、北・東・西日本でかなり少なく、沖縄・奄美では平年並でした。

【10 月の検証結果】

17時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報は88%で例年値^(注)より4ポイント高く、明後日予報は84%で例年値より3ポイント高くなりました。地方別の適中率では、明日予報は北海道地方、中国地方、沖縄地方以外の各地方で例年値以上となり、特に関東甲信地方では例年値よりも8ポイント高くなりました。明後日予報では、中国地方を除く各地方で例年値以上となり、特に関東甲信地方と四国地方では例年値よりも7ポイント高くなりました。

明日の最高気温の予報誤差は、全国平均で例年値より0.3小さい1.3で、すべての地方で例年を下回りました。最低気温の予報誤差は、全国平均で例年値より0.3小さい1.2で、すべての地方で例年を下回りました。

^(注)例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12 月の天気予報の利用にあたって】

12月は本格的な雪の季節の始まりとなります。北日本では雨よりも雪となる日が次第に多

くなり、北日本だけでなく、東・西日本の山沿いや日本海側でも大雪となることがあります。

低気圧が発達しながら日本付近を通過した後、強い冬型の気圧配置となるときには、北日本を中心に暴風や暴風雪、高波、大雪、路面の凍結等により、鉄道や航空機、船舶の運休や欠航、道路の交通障害といった交通機関への大きな影響、また、停電などの被害が発生するおそれもあります。各地の气象台で発表される最新の気象情報や注意報、警報等に留意し、事前の備えをお願いします。